

下田歌子先生の感性表現教育とは

～女子の修養からことほぎへ

Exploring Ms. Utako Shimoda's Educational Method for Expressing Sensibility

—From women's cultivation to conveying words of celebration—

SEKI Tomiko

関 登実子

短期大学部非常勤講師

抄録：

下田歌子は、1889（明治 32）年に実践女学校・女子工芸学校を創設した。

その著書『女子の修養』を平成生まれの中学・高等学校生徒にも理解しやすいように音楽劇を創り、学祖教育の一環として音楽劇の教育的効果を確認する。

Abstract：

Utako Shimoda, a pioneering Japanese educator, established Jissen Women's School and Women's Craft School in 1899.

Drawing inspiration from her book, Women's Cultivation, we developed a musical designed to resonate with middle and high school students of the Heisei era. By aligning with the founder's educational method, we studied the effects of the musical in terms of education.

キーワード：女子の修養 ことほぎ 現代語訳女子の修養－明治の女性学 音楽劇 ワーク
ショップ

Keywords：Women's cultivation, conveying words of celebration, modern translation of women's cultivation— women's studies in the Meiji era, musical, workshop

1 はじめに

目に見えない伝統を説明するためには、どのような表現方法があるのか。目に見えないものを感じ取る心をどのように育成すればよいのか。創立 120 年に際し、感性表現教育手法の研究を行った。日本ではなくなりつつある、ドラマを用いた教育の中に隠されているのではないかと考

えることからスタートした。

『女子の修養』は、1906（明治39）年東京弘道館より出版された。『女子の修養』は、当時の紙相場を左右するほど読まれた本である。筆者の中学生時代には、中高生全員に複製された普及版が配られた。当時原文で読むことは古文より難しく感じられ、一人で読むことは困難であった。

平成19年（2007年）『現代語訳 女子の修養－明治の女性学－』が、下田歌子の生誕地岐阜県恵那市にあるNPO法人いわむら一斎塾より発行された。

岩邑中学校温故知新学習「歌子先生コース」で現代語訳され、中学校一年生にも読みやすく書かれている。本研究は、学園創立120周年に際し、『現代語訳 女子の修養－明治の女性学－』を基礎に、下田歌子先生の音楽劇を創り、生徒が演じ、自身の成長を振り返り、建学の精神を顕彰するものである。

音楽劇を創るにあたっては、中高生徒の有志を集めてワークショップを開き、その活動の中で生徒自らが各自の感性を磨き、成長の過程を振り返りながら進めた。

組織は研究員5名（体育科、音楽科、国語科、家庭科教員）と研究指導者として初風緑氏（実践女子学園高等学校卒業生・元宝塚歌劇団）である。

- ①ダンス部、演劇部、合唱部、の希望者に部活動以外の時間で音楽劇を創るために必要と思われる課題を示し、体験した結果を共有するワークショップを実施。
- ②生徒の意見を取り入れ学校生活の中から、学園の心を伝える音楽劇の脚本を製作。
- ③脚本を上演するための練習（台詞、所作、ダンス、歌唱など）。
- ④上演によってもたらされたものの考察と分析。

以上が方法である。

2 ワークショップ

ワークショップは2015年3月9日より2016年10月14日まで30回。その後11月14日より2017年2月13日まで11回実施した。

一年目の内容は、

朗読－朗読課題『子供たちの夜』向田邦子、『銀河鉄道の夜』宮沢賢治、『蜘蛛の糸』芥川龍之介。

歌唱－歌唱課題「ありのままに」を熱唱する。

身体表現の課題－視覚以外の動きで相手を感じる。こころもからだも水になる。一列で歩く（団体行動）。

『蜘蛛の糸』をサイレントで表現する。

感性表現－「聞く」と「聴く」、「見る」、「視る」、「観る」、「察る」。言葉の違いを体験する。

二年目の内容は、

- ①『女子の修養』を読み解く、②個人から集団の動きへ、③ディスカッションの方法を考える、④音楽劇で大切にしたいことの確認である。

2.1 一年目の内容

〔ワークショップ実施前に自分と向き合い、他の人々との相違を感じ取ることを目的として参加者にアンケートを行った〕

質問の内容は（自分と向き合うために必要なものとは何か？）①今持っている悩み、不安②夢③障害と思うこと④その解決方法と提示されるが、その答えは以下のように記述される。

回答の結果より、生徒の状態が、心と体の病気をおこしやすい場合考える力を失いあいまいになる傾向が強いと感じられた。

心と体の健康を保つためには、楽しみながら物事に対して取り組むことが必要で、そのような取り組みが、ときめき、発想を生むと理解された。生徒は自分の気持ちに向き合ってみると、自分の考え方が変わり、周囲の環境が変わる。過去は変えられないが、未来は作り出せると考えることが多くなる。小さなことから始めるとその結果として自分の中にドラマができる。習慣付けたいことは、自分なりの期間を決めて目標に向き合うことである。この体験により、人間力、思考力が高められ、創造性へとつながる結果となる。

一年目の朗読課題による生徒の学びは何かと考えると、本の読み方が変わったことが大きい。「作者の気持ちを大切に読もうと思った」「言葉の責任がわかるようになった」との回答が多くみられた。また、中学生・高校生合同でワークショップを行うことにより、人々のいろいろな読み方を知る良い機会となった。朗読を学習して、読むことが楽しくなるといった傾向が強くみられた。言葉ではない「…」の表現を考えることが難しいと気づき、新しい自分を発見できたようだ。「見る側、聞く側の人を意識出来るようになった」などの回答が得られた。

一年目の歌唱課題体験による生徒の学びは、「歌うことが得意ではなく、うまくできなかったら恥ずかしいと思っていたが、下手でもいいから思い切ろうと考えた」「歌の上手、下手にかかわらず歌詞の意味、情景を想像で歌うことで、自然に体が動き、息を合わせることができた」「気持ちを込めれば伝わることに気づいた」「歌うとすっきりすることが分かった」「歌は身振り手振りをつけると、楽しくなり声もよく出ることが分かった」との回答を得た。

一年目の身体表現体験による生徒の学びは、最初は戸惑いもあったが、「自分を解放することを学び、以前よりも自分の感性表現が出しやすくなった」「はじめは人から自分がどのように見えるのかが気になっていたが、周囲を気にせず楽しいと感じるようになった」「チャレンジする大切さを学んだ」「ただ歩くだけなのに、皆でそろえるのが難しかった」「行進がそろとう気持ちがよい」「先輩、後輩同士、気遣うことで絆が生まれることを学んだ」との回答を得た。

一年目を終わって、生徒一人一人が日々の生活の中でアンテナを張り、学ぼうとする意識と意思を持って取組み、希望を膨らませたとの感覚を得た。失敗は大切な財産であり、継続することで、根気と成功への道を発見できる。充実感、達成感を一度でも体験することが重要となる。取得した成功体験は次のステップにつながると考えられた。

【指導者がワークショップの中で伝えたこと】

なぜ、そもそも感性を表現することにこだわるのか？

1997年劇場内で奈落へ転落する大事故に遭った。下半身、左半身麻痺となり、日常生活を送るのに人に頼らなければならない毎日。五体満足の時には考えなかった障害と向き合う時間が過ぎて行き、表現とはなにか、と考えた。例えば目・耳・言葉が不自由だとしたら、私にはどのような表現が残されているのかということである。

〈あなたは音楽を聞きますか？ 聴きますか？〉の違いは、聞く（受動的）は耳・肌・骨などを通しての音響情報を受け止める力。聴く（能動的）は音の中でも聞きたい音だけを選択して、それに集中したり、記憶したり反応する力。『きく』を上手に使い分けることで、多様性に富む力を発揮できる。使い分けにより、心に響いたり、メッセージを受け取ることが出来たり、体が反応したりなど、自分と向き合い、自分自身の心にも耳を澄ませるようになる。

〈みる〉については、見るより視る。観るより^み察る。

見る〉視る〉観る〉察する 『みる』の細かさが変化する。特に察るは、気配や空間を細かく観察する。

察るを大切にすると、人間関係や空間を大切にすると心や時が愛おしく感じられる。人からこのように察されると、自分を偽れなくなる。

伝える心とは、常にそれを表現する手段を鍛えておくことが重要である。自分から挑戦して行く、挑戦する目標を選ぶ目を持つ。苦手であると思うことほど、長い期間で続けてみる。自分が不得手と感じる『壁』に出会える迄が第一歩と考える。などの自分自身の心と体に向き合うポイントが伝えられた。

2.2 二年目の内容

〔二年目のワークショップに向けてのアンケート実施〕

一年間のプログラムを体験して、音楽劇のシナリオを構成する段階に入った。『現代語訳 女子の修養－明治の女性学－』は歌子が学習院の初代女子部長を務めたとき、「女子学生としての生活、子育てから^{しゅうとめ}姑母との関係づくりまで、品格を持った女性の心得」を熱く女子学生に向けて綴ったものである。

この中の言葉をどの様にとらえるか、調査を実施した。①～⑨の問いに対して生徒の回答を記載。

① 「年の若い乙女は花のようではなくてはいけません」をどのように解釈できるのか？

生徒の回答

花を見て気分が悪いと思う人はいないような、そんな万人に愛される乙女であるべきである。身なりや行動が、下品でなく美しい、垣根の内だから、家族に愛される大事にされている人だと思う。

見た目がかわいらしいだけでなく、心に裏表がなく純粋でおしとやかな女の子ということである。

- ② 「見るからにいやな気分になる、あきれてしまうようなひどい様子」について過去に感じた例を挙げなさい。

生徒の回答

電車の中で人目を気にせずメイクをする人。

電車で大騒ぎをする子供を注意しない親。

人の悪口ばかり言う人。

- ③ 「慎み深さを感じる中に、近寄りがたい気品」についてあなたが思うことは何ですか？

生徒の回答

他の人より目立とうとする様子もないが、魅力がある人のことである。

とても品があり、場によってメリハリがある行動をとれる人である

落ち着いていて、まわりに気を配れる心を持っている人である。

- ④ 「品格、恥じらいのない行動」であると思った出来事は？

生徒の回答

スカート丈がとても短かすぎたり、胸元が大きくあいた服を着ている人。

公共の場で自分達の世界に入り、道をふさいでいたり、広がっている人。

浴場の脱衣所でビショビショのまま移動している人。

- ⑤ あなたの思う「気の利く人」とは？

生徒の回答

口に出して言わなくても「パッ」と気が付いて行動できる人。

その場に応じて、効率よく動ける人。

自分のこともしっかりと出来ている上で、普通の人では発見できない所まで目配り出来る人。

- ⑥ あなたの思う「気の利かない人」とは？

生徒の回答

自分のことしか考えずに、周りが見えずに行動する人。

時間を守れない人。

相手の気持ちをうまく読み取れない人。

- ⑦ 「自分がされたくないこと」とは？

生徒の回答

陰での悪口。

仲間外れ。

相手の意見を強要されること。

- ⑧ 今の自分の人相はどんなでしょうか？

生徒の回答

将来への不安の表情がある顔。

ひとりになると、何をすべきかわからず、ボーっとしている顔。

疲れているが、達成感がある顔。

⑨ 「女子の修養」を読んでの感想

生徒の回答

読む前は、昔と違うから関係ないと思っていたけれど、今の生活にも大切だと言えることがたくさんあり、振り返ることができた。

書かれてから何十年も経ちますが、当時の下田歌子先生の考えは、今生きていく上でもとても大切な事ばかりだと思う。

学校の教育方針にもある品格というのは、女性としてまた社会に出る一人の人として、とても大事なことだと再確認できた。

生徒の回答より、自分の考えを他の人々に解りやすく伝える表現方法を考える力が向上したと認められた。

音楽劇「ことほぎ コトホギ kotohogi ～見目麗しき花の如く～」の脚本中の場面で、『現代語訳 女子の修養－明治の女性学－』第一章少女の心得の中より「一 垣根の内の花」、「三 常識の育成」、「四 思いやりの心」が朗読発表として設定されている。ワークショップの成果が認められた。

2015年10月18日実践女子大学渋谷校舎で行われたホームカミングデーにおいて、高校演劇部が『現代語訳 女子の修養－明治の女性学－』を朗読。高校生が選んだ内容は以下のようであった。

6ページ「思いやりの心」20ページ「女性が教育を受ける意味」94ページ「真心をもって接すること」131ページ「女子が職業に就くことについて」であった。理解しやすく、興味をそそられる内容を選択したと思われる。

以上の生徒の回答を基に、一年目の個人レッスンから団体へのレッスンへと移り、音楽劇への活動を進めた。

2.3 所作および考え方

生徒の現状をとらえ、考え方を説明し、実践につなげた。

はじめに〈掃除・あいさつ・伝統とは〉について考える。

- ① 掃除とは空間を大切に作る心。無心で磨く、物を大切に作る心。外見を気にする前に、ひたむきに打ち込む精神を習慣づける。場の整え方、ものの配置に気を配ることである。
- ② あいさつとは、今日という一日学べることに感謝。感謝の気持ちからすべてが始まる。正門での一礼。授業での一礼。家庭・社会での一礼。が基礎となる。
- ③ 伝統とは、人から人へ。先輩から後輩へ。師から生徒へ次々と受け継がれるものである。

☆実践女子学園の伝統とは何か？

☆下田歌子先生の魂の受け継ぎは？

☆マークが音楽劇の中心となる内容である。

次に〈美しい動作、品格とは〉について、イスの座り方、イスの立ち方、足の運び方、位置の決め方・止まり方について実践してみる。そして実際に 脚本にある **卒業式の場面を再現してみる。**卒業証書の受け取り方の最も重要な要素は、校長先生の真正面に立つことである。点の上（真正面）に立てないまま受け取る。生徒は正面に立てないことに気づかない。どの位置に立てば良いかが判断できないという状態が多く見られた。人と向き合う時の正しい位置で止まる方法を教える。

立ち座りのタイミング お辞儀の角度とタイミングを揃える。この動作には、揃える意識を持って周囲の状況を判断し、様々な力を鍛える必要があった。筆者は大学の講義の前後に礼をする機会を設けていたがなかなか成功することは出来なかった。個人の意識を高めて、集団としての美へ向かうと心はひとつになる。

〈チームワーク力とは〉まず会議の進め方、リーダーを選ぶことの必要性を教える。

時間がかかりすぎる話し合いの改善方法は、いつまでにどのようにしたいのか？役割を分担する。リーダーを決め、リーダーは意見を引き出す。メンバーは自分の意見を口にする勇気を持つ。アイデアは多いほうが良いことを意識させる。

2.4 音楽劇の脚本と生徒の活動

作品のイメージを生徒に伝え、音楽劇「ことほぎ コトホギ kotohogi ～見め麗しき花の如く～」の第三場着物袴姿での日舞 Dance の場面で、課題の曲を示し、生徒が話し合い、振付を考えるという作業課題を提示した。課題達成のために、リーダーが一人で抱え込まず、メンバー全員で問題点を洗い出し、分析をおこなう作業を実施。この作業に参加することにより、一人一人が音楽劇を創ってゆく一員であるという意識を体験し、みんなで話し合うことは楽しいという体験を得た。

この場面は日本文化を学ぶ機会と考え、浴衣着装から着物の着付けの基礎を学び、表現の広がりを目指した。下田歌子先生考案の女袴をつけ舞踏をする場面とした。

指導者より 与えられたオリジナルの課題曲に対して、色々な映像を参考にしながら生徒全員でアイデアを出すという取り組みが始まると生徒に変化が見えた。学びの後に、質問したい内容が明らかになり次々と質問がなされる。生徒はわからなかったものがわかるようになると興味をもって取り組むようになる。指導者は質問をした生徒の興味関心に合った方法を考えることで、生徒自身の活動が活発になるため、常に生徒の実態把握が求められる。

活動を通して生徒の学んだこと は、あいさつが揃うと気持ちが良いことが体感でき、自分たちは考え方に固定されていると感じ、新しい自分の発想を生み出して、誰にも真似できないものを創っていきたいと考えるようになった。例えばこれからも多くの「初」を体験したい、自分で限界を決めない、という積極的な考えになる。一点ではなく、全体を見る。頭で考えずに、心で感じた方向へ動くようになった。

〈脚本にある「花は咲く」と「校歌」を同時に美しく歌う〉活動について、「校歌」に込められ

た下田歌子先生の思いと「花は咲く」の歌詞をともに受け止めてみる。を通して（朗読の力は踊りにも歌にも通じるので）根底に流れる「愛」と「こころ」に気づく。広い視野をもって景色を感じてみるができるようになる。

この場面を通して「生徒は」もっと歌を真剣に歌いたい、経験できて良かった。という感覚を持つ。卒業式などで歌ってきた「校歌」。その時は静かでしみりとした印象があったがこの1時間で歌った校歌は明るくて、未来への歌であるということを知った。校歌も歌い方が変わると、感じ方が今までとは違うと感ずることができるようになった。という感覚を得た。

〈「着付け」と「動き方」〉については、帯の結び方は多くの種類がある。年齢、季節による違いを知る。洋服の動きとの違いは、手先、足先、ひざ、しとやかになる理由を知ることができた。

背中、首、腰の動き。歩幅、テンポ。扇の使い方（手首、ワキ、ひじ）の滑らかな動き。和服と洋服を着用時のおじぎの違いや言葉遣い、おしとやかになる理由を知ることができた。

【音楽劇、シナリオの為にディスカッションをする】という活動を通して、生徒の考える学園のブランドイメージに向き合い、自分の意見を発言できる力がどの位ついたのか？言葉の持つ責任のイメージを知ったうえでお互いに伝えられるか？を確認した。

〈学園の魅力とは何か〉を考えてみる。短い言葉で表現をしてみると、伝統がある。礼儀、挨拶が厳しい。元気。歴史がある。セーラー服。笑顔。重み。優しい。部活が活発。日本文化実習がある。さまざまな考えがある。ネイティブ（外国人教師）が多い。という回答もあった。

〈学園に足りないものは何か〉を考えてみると、実行力。保守力。踏み出せない。発信力がない。はっきりとした魅力がない。誇りを持ってない。知名度。団結力。活気。調和。輝き。という回答であった。

〈その他〉のイメージとして、かたくな。おしゃれができない。個性がない。個性が出せない。ほめて伸ばしてほしい。厳しすぎる下校届。アルバイトがしたい。文化祭がつまらない。良妻賢母。ブランドが足りない。という表現を得た。

【脚本を創るうえで】考えた項目は実践女子学園のブランドとはなにか？である。

120周年に向かって、今こそ色々な角度からの見直しを考えるチャンスである！のではないかなど。

生徒の活動を通して、〈タイトル〉が決められた。

ことほぎ コトホギ Kotohogi ⇒ 現在、過去、未来 をイメージしてのタイトルである

〈サブタイトル〉は、～見目麗しき花の如く～

〈詞〉

常磐の松に誘われて 見上げた緑爽やかに

澄み切った空 白い雲 柔らかな風

いざ 八島に希望を抱き

今 実践の時 今 羽ばたく時
見目麗しき乙女らの 香りただよう …姿
初風緑

この〈詞〉をイメージの軸として演じることとなる。

【音楽劇で大切にしたい表現方法】とは、

入学式、卒業式で歩いて行った生徒が中央の点で止まらない¹⁾に対して、立つ、受け取る、座る、歩く、角を切る。ビシッと中央の点で止まれる事が、立つ人も客席の人も、式典に出席している方々の気持ちが良いことを理解する。練習することをあきらめずに、根気よく繰り返し目標に到達した。

【音楽劇の配役ほか】について

〈配役〉はダンス部にはセリフ、歌。演劇部には歌、日舞。と感性の広がりを考え配役した。学年にこだわらずに、交流を考えた。苦手意識を取り除くためである。

〈台本〉台本をテキストとして、「白空間」をいれ、アドリブの枠を作り、生徒たち自身の言葉をセリフにするよう指示。台本をテキストにする事で、考える力、感じる力を育てるため。

〈台本を書き終わって〉の指導者の考えは、はじめは何のために努力するのかわからないことも、先が見えないからとあきらめずに継続することによってわかってくることがあるという根気を育てる。伝統は渡してもらっただけでなく、受け取ることが大切であると理解をすすめる。創立者の考えは、時代を超えて、難解なことではなく、シンプルな人としての心であったと考える。感性を育成するのに近道はない。との見方からである。

3 音楽劇「ことほぎ」の上演

2017年2月14日第1回「ことほぎ コトホギ kotohogi ～見目麗しき花の如く～」上演。

2017年2月18日第2回「ことほぎ コトホギ kotohogi ～見目麗しき花の如く～」上演。

2019年5月11日朗読劇「ことほぎ コトホギ kotohogi ～乙女らよ大志を抱け～」上演。

2019年12月14日朗読劇「ことほぎ コトホギ kotohogi ～ゆるぎなき ゆついわむらのとこしえに～」岩村コミュニティーセンター下田歌子賞の表彰式にて上演。

3.1 「ことほぎ コトホギ kotohogi ～見目麗しき花の如く～」

【音楽劇、発表会を終えての生徒の学び】として体感したことは、

① 発表会まで（ワークショップ、配役、練習など）

他のクラブとの合同練習が新鮮で良かった。実際に参加してみて自分の身になることや新しい技術を得ることができて良かった。今回の発表会は、今までやってきたすべてのことが入っていたのだと思った。他では体験できない、礼儀から様々なことを学べた。はじめは朗読をして何になるのかと思ったが、大切な事であるとわかった。挑戦をして、自分が見つけられた。新たな発見、学びがあった。

② 1回目の公演を終えて（2回目へ向けて）

たくさんの人々に支えられていることを実感した。達成感を味わえた。たくさんの人に もっと見てもらいたい。「感動したよ」といってもらえてうれしかった。自分の最大限は 出せなかった。2回目までにもっと改善して完璧にしたい。

③ 自分の反省

立ち姿をきれいにする。もっと練習して、緊張しないままで備えたい。扇がうまく使えな かった。最後の礼のタイミングが合わなかったのが残念。もっと、出来ることがある。少 しでも何かが伝えられるように作品全体からもっと考えたい。自分らしく頑張りたい。

④ どのように変えていけるのか？

自信を持つ。表情を意識。歌う時の笑顔を忘れない。声を大きく。歩き方を美しく。立ち 位置をしっかりとする。揃える。自分の言葉にしてゆく。全体の確認を意識する。階段の 上がり方、降り方を注意。左向け左をしっかり。礼を揃える。歩く時の手の振り加減を 意識する。手の位置を決める。ぶらぶらしない。との結果であった。自分を振り返り、未 来へ向けて、方向性を得たようだ。

【古典選択授業としてことほぎを観劇して】 高校生の意見は、以下のようである。

①私はことほぎの音楽劇を見て、印象に残ったものが3つありました。1つ目はオープニング の下田歌子先生の登場の場面、2つ目は扇子を使ったダンス、3つ目は朗読の内容です。

1つ目、スクリーンを使い、座っていた下田歌子先生の後姿を見た時、私が今までこの実践女 子学園で友達に恵まれ、素晴らしい先生方に囲まれてこられたのは、今ここにいる下田歌子先生 のおかげであったのだと感じました。2つ目、扇子を使ったダンスがとてもすてきでした。袴を 着たままなのに、情勢の力強さ、繊細な姿などいろいろな姿が浮かび、現代の女性が必要として いる姿がたくさん見えました。将来、私もこのダンスで表現されていた力強い、かつ美しく、知 性ある魅力に満ちた女性になりたいです。3つ目は朗読の内容です。生徒の読み上げた一つ一つ の朗読は、私が親や先生に言われてきた言葉でした。「人の目を信じるのではなく、おのれの目 を信じる。」や「西洋の女性のように力強く生きる。」などの言葉は私の胸に響きました。下田先 生役の友人の言葉が、私の忘れかけていた大切なものを思い出させてくれました。

②私はことほぎを見て、表現力の豊かさとストーリー性、メッセージ性に強く心を打たれまし た。劇中の扇を使ったダンスはとても迫力があり、また着物を着ていたことから、どこか日本の 懐かしい感じがしました。ストーリーとしては、下田歌子先生の当時持っていた思いそのものが 百年経たとしても、受け継がれていることがよく伝わりました。

朗読の場面は印象的で、言葉のひとつひとつに感銘を受けました。また、最後の全員合唱で校 歌をきれいにハモリ合い、その声の美しさに心惹かれました。ことほぎを通して改めていろいろ 学ぶものがありました。表現するものには訴える力があるのだなと思いました。素敵な音楽劇を 本当にありがとうございました。

〈素直な感性・個性を生かしてゆくには〉指導される側が、親子、教師など信頼できる大人に

囲まれること。指導する側の大人は手助けをすぐにしたり、答えを急がせたり、教えることよりも待つ余裕を持ち、答えのヒントを与えることである。つまりきを繰り返すことは悪いことではない。感性育成に近道はない、ということを指導者は常に考えることが重要である。

3.2 朗読劇「ことほぎ コトホギ kotohogi ～乙女らよ大志を抱け～」

2019年5月11日（土）午前10時より実践女子学園中学校高等学校桃夭館桜講堂において上演、創立120周年記念イベント“J-FES”の来場者の他中学校1・2年生が観劇した。

脚本・構成・演出は本学卒業生の初風緑氏が担当した。岩村親善大使鈴木隆一氏、岩邑小学校、岩邑中学校、岩邑うた子会、岩村醸造株式会社、中高父母の会の協力により上演に至った。音楽劇「ことほぎ」の第二話として制作。第二話は第一話制作にあたって生徒たちと行った様々な交流や岩村を訪問したこと、第一話終了後に再び訪れた岩村での会話などから着想を得て、第一話から第二話への上演に至った経緯そのものを朗読劇とした。出演者は、第一話に出演した高校卒業生2名と昨年度下田歌子賞を受賞した岩村在住の中学3年生に出演を依頼した。詳細は下田歌子女性総合研究所ニュースレター13号に掲載。

3.3 朗読劇「ことほぎ コトホギ kotohogi ～ゆるぎなき ゆついわむらのとこしえに～」

2019年12月14日岐阜県恵那市岩村コミュニティーセンターで実施された下田歌子賞表彰式の中で上演。第二話で中・高・大学生が舞台・客席上で揃いの浴衣で、スクリーンに岩邑うた子会総会で踊られた「岩村音頭」を背景に踊り、復活した岩村音頭をはじめとする朗読劇を高校卒業生と岩邑中学校3年生、下田歌子賞受賞者で上演した。

【ことほぎに出演することで得られたもの】は、

遼香さんより

私にとって、「ことほぎ」の経験は、新しい挑戦の連続でした。

お芝居や、役作り、袴を着ての立ち振る舞いなど、ダンス以外のことは、ほとんど初めてでした。特に、お芝居が難しかったと感じました。私は、ミュージカルなどの舞台作品を観ることがとても好きですが、観るのと実際に自分が演じるのでは全く違い、想像以上に難しかったことを覚えています。本当に私が下田歌子先生を演じて良いのか自問自答することもありました。役をいただけたことに感謝し、歌子先生を題材にした漫画を読み込み、役作りを進めました。

また、初風先生からも沢山のことを教えていただきました。特に、文章の中の句読点や空白にも意味があるということを教えていただき、言葉をひとつひとつ丁寧に読み取れるようになったと思いました。また、ことほぎのお稽古の中では、歌子先生が伝えたかったことを考えながら行動するようにと教えていただき、常に考えながら行動することや物事の意味をひとつひとつ考えることの大切さを改めて学ぶことができたと思います。

ことほぎの終演後、中には涙を流してくれる人もいて、頑張ってた良かったと心から思いま

した。両親もととても喜んでくれました。

歌子先生を演じた経験から、積極的に新しいことに挑戦する力と自信を持つことができ、大学生活でも活きているのではないかと思います。

また、120年前に女子教育の大切さを広めてくださった歌子先生への尊敬の念が深まり、私も品格のある女性になれるように努力していきたいと思います。貴重な経験を、本当にありがとうございました！

なつ子さんより

私は全三話のことほぎに参加させていただいた。

演劇したさにワークショップに参加したのが始まりであったが、下田先生の想いやそれを引き継ぐ初風さんや先生方の姿を近くで見えて触れて、私もその想いをつなげていこうという気持ちに変わっていった。言葉とはすごいもので、初めて台本をいただいて声に出したとき台詞ではなく心からの言葉として私の心に響いてきたものがあった。

第一話ことほぎは、ダンス部、演劇部、合唱部が合同で行った。得意とするものが違う者達が集まって一つの舞台をつくることは初めての体験で不安もあった。しかし、お互いを決して非難するのではなく、むしろ受け入れることが自然とできている姿がその不安を消してくれた。相手を尊重することができる素敵な人達と一步一步舞台をつくれたことを嬉しく思うのと同時に、知らないことを知ろうとすることで可能性は高められると学ぶことができた。今までとは違う形で表現をすること、互いに補い合いながら、高めあいながら多くを吸収できたこと、全力になれたことが楽しくて仕方がなかった。

第二話ことほぎからみどり役を授けていただいた。前回とは違いより多くの人に伝えることができる機会であったのもあり、言葉にいかにも多くの想いを乗せて、届けられるか。演技とは違う語りの身としてどう表現しようかと向き合う時間が多くあった。なにより、映像や音楽など細かい所までこだわる指導者や音声の担当者の姿は印象的であり学ばせいただいたことも多かった。また下田先生役の若夏菜さんとの出会いも大きなものであった。どんどん下田先生になっていく彼女。本当に下田先生とみどりがこの作品を通して交わったような感覚があった。

第三話ことほぎでは、中学二年生の移動教室から五年ぶりに恵那市岩村町を訪れた。小中学校の皆さんのエッセイはまっすぐで心に響き、忘れかけていた思いに出会えた気がした。恵那の方々の優しさにもたくさん触れた。地元の方が作ってくださった菱餅の優しい味も忘れられない。

全三話に関わらせていただいて、思いを受け継ぐことをやめてはならないと考えた。残された人達、つまり私たちの想いや考え次第で、形は変わろうとも繋いでいくことができるということだ。「ことほぎ」は実践女子学園にそのことを思い返させるきっかけとなったと感じる。相手を尊重し、自分が感じたことも大切にできる人に。何事も実践すること挑戦すること向上する心を持ち続けることのできる人に、自分らしく輝く女性になろうと考えさせら

れた。

若夏菜さんより

ことほぎでは下田歌子先生の強さ、やさしさ、美しさをセリフひと言ひと言から感じました。練習を重ねるたびに自分の背筋が伸び、下田歌子先生の凛とした姿が頭の中に浮かびました。本番は想像以上に緊張していましたが、自分は下田歌子先生だと思いその時は、凛とした姿でステージに立つことができていたのではないかと思います。下田歌子先生の凛とした姿勢を貫いた生きざまは私にはまだ少しもできていません。しかし、いつかは下田歌子先生のような姿になりたいとも思っています。これから先越えなければいけない多くの壁にぶつかったとしても、下田歌子先生的こと、ことほぎで演じた下田歌子先生を思い出し乗り越え、成長していこうと思います。

保護者より

初風緑さんプロデュース「ことほぎ」は、若夏菜にとって、大変貴重な機会であり、この「ことほぎ」が今も志をもち続け、未来を切り拓こうとする強い娘をつくっていると感じています。

初風さんの台本に描かれる歌子先生の言葉から、歌子先生の思いと初風さんの思いが重なり、娘は次のようなことを学び得たのではないかと感じています。

- ・何としてもやり遂げたいという強い信念
- ・実践と岩村をつなぐことの大切さ
- ・歌子先生を輩出した岩村の伝統とそれをつなぐ人々の思い
- ・初風さんのご指導によるステージ上での立ち居振る舞いや思いを言葉に乗せて伝える話し方、伝え方
- ・大舞台に立つ度胸
- ・皆さんからのお褒めの言葉をいただき、自己肯定感を高める

「ことほぎ」の中で、娘は、「下田歌子先生」となり歌子先生として発した言葉は、なりきればなりきるほど、自分の言葉へとすり替わり、知らず知らずのうちに、自分も歌子先生のように強い志をもって自分の未来を切り拓く思いへと変わっていったのだと思います。

その証拠に、「ことほぎ」の舞台を終えて、終わりではなく、この「ことほぎ」で学んだことが次々とつながっていきます。

中学3年生 下田歌子賞優秀賞受賞 「ことほぎ」岩村での再演

高校2年生 「嚶鳴フォーラム in 恵那 2022 プレイベント～21世紀を生きる君たちに向けて～」におけるパネルディスカッション「ふるさとを愉しむ、先人に学ぶ」に出演。恵那市長さんと席を並べ、高校生でありながら、下田歌子先生から学んだこと、将来に向けての自分の思いを語りました。

「ことほぎ」を通した経験は、下田歌子研究→「ことほぎ」→下田歌子賞→「ことほぎ再

演」→パネルディスカッションとつながり、そのたびに下田歌子先生の生き方に触れ、若夏菜自身の志を見つめ直し、未来を切り拓いていく強さを学ばせていただいた唯一無二の経験・志教育であると感謝しています。

4 まとめ

120年の歴史を持ち、たくさんの卒業生がいる本学園で、下田歌子先生を題材にした作品ができないだろうかと、卒業生であり実践女子大学短期大学の元学長飯塚幸子先生はお会いするたびに筆者に囁かれた。一方、おじいさまが大の下田歌子先生ファンで、おばさま二人も卒業生である初風緑氏は下田歌子先生の音楽劇を創ってみたいと希望を持っていた。この思いを原動力に「感性表現手法育成教育プログラムの開発」として研究がはじめられた。

「感性表現教育」は、本学園中学校高等学校において「豊かな感性をはぐくむことにより、的確な状況把握能力と認知力を獲得し、高いコミュニケーション能力を得て、社会の激しい変化の中で主体的に生き抜くための優れた判断力を持った女性を育成すること」を目的に行われ、独自の教育の柱となっている。それは単なる芸術の鑑賞ではなく、生徒の生涯を支える主体的で、創造的な活用型学力の育成を目指す教育として、教科活動、学校行事、生徒会、クラブ活動において実施されている。

本研究においては、生徒の現状をとらえつつ、カリキュラムを作成しワークショップを進めた。生徒の考えを聞くために沢山の質問をしたにもかかわらず、毎回真摯な回答を得た事は研究を進めていくうえで貴重な情報源となった。質問を考える側と回答する側もどのような答えが出てくるのか、興味関心が高くなった。

台本はテキストであるという作者の考えにより工夫をいたるところでしたため多くの時間を要したが、二年間のワークショップがふさわしいとの結論に達した。試行錯誤の結果このようなまとめかたとなった。

部活動や年齢が異なる生徒の交流は微笑ましく、本学園中学校高等学校の卒業式に歌う下田歌子作詞「送別の歌」の中の「姉とたのみしわが友よ」を思い出させる情景であった。

また、ことほぎ第二話を「J-FES」で上演の際、「岩邑音頭」の踊り手に大学生が応援に入り、スクリーンいっぱいに映し出される岩村うた子会の方々とともに舞台を盛り上げた。さらに第三話では第二話のこの場面の映像を映し出して岩邑中学校の中学生が加わり心温まる場面となった。

ひとりひとりの小さな行動が重なると楽しい場面を作り出せる。自らの五感を通して得た情報から、表現をするには受け取る相手が必要である。今後の教育には、欠かすことができないのが他の人とどのようにして交流するか、その「場の提供」である。今後学園の中で生き生きとした女学生のすがたを見ることを期待する。

中高から大学までの教職員、父母の会、実践桜会のご協力ご支援を得て実現に至った。実践女子学園を愛してやまない人々が集まり、ことほぎができた。御礼申し上げる。

『現代語訳 女子の修養－明治の女性学－』の中に、才能も、学力も、芸事も、知識も、結局

は一つの「徳（品格）」というものには勝てないものだということを、しっかりと心に刻んでおきましょう。という一文ある。学祖が考えた感性表現教育とは、一生涯を通して感性を磨き続けること、人間らしい純粋で徳のある女性を目指すことであったと考える。

〔注〕

指導・脚本・構成・演出は初風緑氏が担当。エビローグの映像は岩村醸造株式会社の協力による。映像岩邑音頭
はうた子会の協力による。

岩邑小学校、岩邑中学校は統合へ向けて、学校名が変更される可能性が強い。

本研究は、一般財団法人東京私立中学高等学校協会東京私学研究所の平成 27・28 年度東京私学教育研究所研究
協力学校として助成を受けた。